

## 万葉集巻十四の編纂資料の実態

村瀬 憲 夫

### 一 「東歌らしくない東歌」の問題

巻十四に収められた、東歌と言われる歌々は、いったいどのような人々によつて、どのような場で、どのような時に、歌われたものなのか。その歌々は古いのか新しいのか、あるいはそもそも古新など問題にすべきでないほどに、誦詠と享受の自在な時間的広がりを持しているのか。そしてその歌々はどのようにして記し留められ、どのようなかたちで継承され、万葉集に採録されることになったのか。

一口に巻十四所収歌の実態と言っても、以上のようになささまざまな側面からの、説明すべき課題が残されている。本稿では、その諸側面の中でも、巻十四編纂のための資料の実態（編者の目の前には、どのような姿の資料として、歌が積まれてあったのか）という側面

を考察する。

巻十四を順に読んでいくと、東国語の訛りが頻出し、また東国特有の言葉、習俗、発想、感性等々が豊かに歌われていて、いかにも「東歌」と実感できるものが多い。しかしながらなかには、どこに「東歌」らしさがあるのだろう、例えば巻十一・巻十二所収の歌々と並べてみても、一向に差異の見出せない歌も、数はそれほど多くはないものの、確かに存在する。これはどうしたことか。

おそらくこれは、東国以外の地（主として都）で作られ歌われていた歌が、東国へ伝播しその地でも歌われていたか、あるいはまた都びとが東国に来て歌を作り、それが東国に残されていたためであろう。「東歌」にそういった性格の歌が混じっていても一向に構わないのである<sup>1</sup>。

ただ、卷十四の所収歌を、編纂という側面から考えようとしている本稿にとつては、いわゆる「東歌」らしくない歌々を、どのようにして卷十四に収め得たのかは、やはり検討しなければならぬ問題である。というのは、前稿<sup>2</sup>で見たように、卷七、卷十、卷十一、卷十二、そして一部は卷十三も、編纂資料を共有している場合があると判断されるからである。つまり共通の資料の中から、それぞれの巻、それぞれの部立、それぞれの分類項目に合致した歌を、抽出していくという編纂実態が観察されるのである<sup>3</sup>。同じく作者未詳歌卷である卷十四の編纂資料も、卷七、卷十、卷十一、卷十二、そして一部は卷十三のそれと重なる部分があるかもしれないのである。もしそうだとすると、「東歌らしくない東歌」を、どのようにして卷十四に収め得たのかという疑問が生じるのである。

もつとも、卷十四の編纂資料と、卷七、卷十、卷十一、卷十二、そして一部は卷十三の編纂資料とはまったく別で、編者が手許に置いた編纂資料という面では、両者は決して交わることはないと考え向きもあろう。言葉遣い、歌の内容といった点で、両者の醸し出す世界には大きな差異があるといった印象は否み難く、そ

の意味で、編纂資料という面でも両者はおそらく交わることが少ないであろうとは、本稿も考える。ただそのことを、本稿は改めて確認し納得しておきたいのである。

以上のような趣旨で、本稿では、卷十四所収歌の中の、「東歌らしくない東歌」を取り上げて、検討を加えてみたい。なお、本稿でいう「東歌らしくない東歌」とは、(一) 東国の方言、訛りを含まない、(二) 卷十四所収歌にほとんど限定されて用いられている、いわば卷十四特有の言葉を含まない、(三) 東国の地名を含まない、(四) 卷十四所収歌に特徴的な発想、習俗、生活形態を含まない等を判断規準とした。もとよりこの規準は、とりわけ(四)の規準は、主観性を払拭し難い面がある。個々の事例にそくして判断することとする。

## 二 「国土不明歌」中の「東歌らしくない東歌」

卷十四所収歌は、国名の明らかな歌(国土判明歌)と、国名の明らかでない歌(国土不明歌)(卷十四の末尾に記された「以前歌詞未得勘知国土山川之名也」

から〔未勘国歌〕とも呼ぶ」との二群に分けられている。本節では、この〔国土不明歌〕の中に見られる「東歌らしくない東歌」のひとつひとつを取り上げ検討することによって、巻十四の編纂資料の実態を探ってみたい。なお〔国土不明歌〕中には、地名を含むものもあるが、これは編者自身が国土不明歌と認定しているのであるから、巻十四への採録という面から言えば、地名は無きにひとしく、従って先の(二)の判断基準には該当しない。

まず〔国土不明歌〕の「雑歌」部の歌から見ていく。

(1) 鈴が音の駅家の堤井の水を給へな妹が直手よ

(14) 三四三九

この歌は、おそらく旅の途中のさる駅家での詠であろう。「鈴が音」とあるので、官人の公務出張の旅が想定されているよう。ところで、巻十四東歌の編纂という面から見た時、この歌には、東国を想定できるものはない。東国語はない、作者はおそらく都の官人、駅家は全国に設置されていて、東国に限定できるものではない。では、巻十四の編者が、この歌を東国の歌として、巻十四に収め得た、その拠り所は何か。

それはこの歌が東国に関わる歌々と共にあったから

であろう。つまり、この歌が、東国の言葉、あるいは東国の地名を含む歌々の収められた資料の中にあつたために、編者はこの歌を、巻十四「東歌」に収め得る歌として、安心して採用したのである。本稿は、巻十四の編者の手許に、未整理ながら、東国歌を集めた資料(もちろん一種類ではなく、種々の様相を呈する複数の雑多な資料群)があつたものと想定する。巻十四所収歌のほとんどが相聞歌であることからすれば、この「東国歌を集めた資料」も、ほとんどが相聞歌で占められていたであろう。本稿はこれを「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」と呼ぶこととする。

(2) ま遠くの雲居に見ゆる妹が家にいつか至らむ

歩め我が駒

(14) 三四四一

柿本朝臣人麻呂の歌集に曰く、「遠くして」、また曰く、「歩め黒駒」

この歌は、巻七「雑歌」部の「行路」の項に、ほとんど同一歌が、柿本朝臣人麻呂歌集所出歌として採録されている。

遠くありて雲居に見ゆる妹が家に早く至らむ歩め

黒駒

(7) 二二七二

この歌にも東国と認定できる言葉等はない。左注に

「柿本朝臣人麻呂の歌集に曰く」とあるが、これは柿本朝臣人麻呂歌集から卷十四へ採録したという意味ではない。参照しているのである。この歌も、「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」から採録されたものと思われる。

(3) うらもなく我が行く道に青柳の萌りて立てれば物思ひ出つも (14三四四三)

「うらもなく」の語を詠んだ歌は、万葉集にもう一首ある。卷十二の三一八〇番歌である。

うらもなく去にし君ゆる系朝な朝なもとなぞ恋ふる逢ふとはなけど (12三二八〇)

当面の三四四三番歌にも東国特有の言葉、発想はない。にもかかわらず、卷十四に収められたのは、この歌が「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」にあつたからであろう。

(4) 白栲の衣の袖を麻久良我よ海人漕ぎ来見ゆ波立つなゆめ (14三四四九)

『萬葉集釋注』は「白栲」や「見ゆ」というのは東国の歌にはこのみで、一首は、全体に都風の感じが強い」と指摘する。また「麻久良我」は地名であるが、所在は未詳である。卷十四の編者がこの歌を〔国

土不明歌〕の項にいられていることからすれば、編者自身にとつても所在未詳の地であり、従つてこの歌を卷十四に収めたのは、地名の存在に依つたわけではない。この歌が、「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」の中にあつたことに依ると考えるのが適切である。

(5) おもしろき野をばな焼きそ古草に新草交じり生ひは生ふるがに (14三四五二)

この歌が、東歌らしいか東歌らしくないか、その判断は主観の占める部分も多い。『新編万葉集全註釋』は「内容といい調子といい、東歌らしくない。京人の作であろう」とし、一方『萬葉集釋注』は、この歌に「東国の農民らしい、自然への行き届いた目」を見ている。卷十四の編纂という視点から言えば、東国語も東国の地名も含まない、この歌を卷十四に収めたのは、「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」にこの歌があつたことに依ると考えるのがよいだろう。なお、この歌は、初句を「春日野は」として『古今和歌集』に、また初句を「武蔵野は」として『伊勢物語』に採られている。『伊勢物語』が、この歌を採り「武蔵野は」としたのは、本歌が万葉集の東歌としてあることも影響しているよう。

(6) 風の音の遠き我妹が着せし衣手本のくだりま  
よひ来にけり (14三四五三)  
巻七「雑歌」部の「臨時」の項に、次のような歌がある。

今年行く新島守が麻衣肩のまよひは誰れか取り見  
む (7一二六五)

巻七のこの歌は、防人を詠んだものであるから、当  
面の三四五三番歌も防人の詠んだ歌と見ることも可能  
である。しかし袖のほつれを詠んだ歌は巻十一にもあ  
る。

白袴の袖はまゆひぬ我妹子が家のあたりをやまず  
振りしに (11二六〇九)

それに「風の音の遠き」という表現も、「京人の作」  
〔増訂萬葉集全註釋上〕を思わせ、三四五三番歌単独で  
は、巻十四に採録すべきか否か、編者は迷う歌である。  
この歌が巻十四に採録されたのは、巻十四に収めるべ  
きことを示唆する、他の歌々〔東国に関わる相聞歌を  
中心とした一大歌群〕と共に、編者の手許にあったか  
らであろう。

(7) 庭に立つ麻手小衾今夜だに夫寄しこせね麻手  
小衾 (14三四五四)

この歌は、一面では東国の土の香り豊かな、東歌ら  
しい歌とも言えようが、一方で「女が男を「夫」と客  
観的に称するのは、東国の歌ではこだけである」  
〔萬葉集釋注七〕という指摘もあり、また巻九に次の  
ような都人の旅の歌（大宝元年の紀伊国行幸時の作）  
も見られ、東国の歌とも断定できない。

紀伊国にやまず通はむ妻の社妻寄しこせに妻とい  
ひながら 一云妻はにも妻といひながら

(9) 一六七九、或云、坂上忌寸人長作  
結局この歌を巻十四に収めることを保証したのは、  
この歌が属していた資料〔東国に関わる相聞歌を中心  
とした一大歌群〕に依ると判断される。

以上「雑歌」部の歌を見てきたが、次に「相聞」部  
に入る。

(8) 相見ては千年や去ぬるいなをかも我やしか思  
ふ君待ちがてに 柿本朝臣人麻呂歌集に出づ (14三四七〇)  
この歌には、人麻呂歌集に出ている由の注記が付せ  
られているが、実際には巻十一の出典不明歌群に見  
出すことができる。

相見ては千年や去ぬるいなをかも我やしか思ふ君  
待ちがてに (11二五三九)

この三四七〇番歌が、もし例えば卷十一、卷十二等と共通の編纂資料の中にあつたとすれば、三四七〇番歌は卷十四へ取られることはなかつたはずである。東国を指し示す資料（東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群）の中にあつたがゆえに、卷十四にその位置を占めることになつたのである。

(9) 恋ひつつも居らむとすれど遊布麻山隠れし君を思ひかねつも (14三四七五)

この歌には卷十二「悲別歌」部に類歌がある。

よし系やし恋ひじとすれど木綿間山越えにし君が思ほゆらくに (12三一九一)

この二首を並べてみると、両者にはまったく差異がない、つまり三四七五番歌に東国の歌としての特性は見られないことが了解される。しかるにこの三四七五番歌が、卷十四に採録されたのは、この歌が収められていた資料が、東国に関わる歌を一括したものであつたからであろう。

(10) あり衣のさ糸さ糸しづみ家の妹に物言はず来にて思ひ苦しも (14三四八一)

柿本朝臣人麻呂歌集の中に出づ。上に見ゆることすでに訖りぬ。

この歌は左注で断つていようように、卷四に小異歌がある。ただし柿本人麻呂の作となつていて、人麻呂歌集の歌ではない。

玉衣のさるさるしづみ家の妹に物言はず来にて思ひかねつも (4五〇三)

卷十四「国土不明歌」の「相聞」部および卷二十の駿河国の防人歌に次のような類歌がある。

水鳥の立たむ装ひに妹のらに物言はず来にて思ひかねつも (14三五二八)

水鳥の立ちの急ぎに父母に物言はず来にて今ぞ悔しき (20四三三七)

この二首の歌から判断して、当面の三四八一番歌も、おそらく東国で歌われていた歌なのであろう。そして、本稿でいう「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」に収録されていたのであろう。だからこそ、卷十四の編者は、人麻呂（人麻呂歌集）の歌の存在を知りながらも、三四八一番歌をあえて卷十四に採録し得たのである。

(11) 梓弓末は寄り寝むまさかこそそ人目を多み汝をはしに置けれ 柿本朝臣人麻呂歌集に出づ (14三四九〇)

「はしに置」くといつた言い方は、他には卷十の一八

六八番歌のみに見られることからしても、この三四九〇番歌単独では、東国に関わる歌と認定されることはなかつたであろうと思われる。

(12) 柳こそ伐れば生えすれ世の人の恋に死なむを  
いかにせよとぞ (14)三四九一)

恋死を詠んだ歌は、巻十、巻十一、巻十二に比して、巻十四には極めて少ない。他には三五六六番歌があるのみである。「恋死は同じく作者未詳歌の中にあつても、とくに非東歌的、巻十、巻十一、巻十二の世界のものであつたといつてよい」(拙稿「恋死―万葉集、三代集―」『和歌山大学教育学部紀要』〔人文科学〕第二六集、一九七七・三、七頁)。

この歌を巻十四に採録することを保証したのは、この歌の収められていた資料の性格(「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」)であつたと考えられる。

(13) 谷狭み峰に延ひたる玉葛絶えむの心我が思は  
なくに (14)三五〇七)

この歌には、東国を思わせる固有の表現はない。しかも次のような類歌があつて、巻十一、巻十二との間に差異は見出せない。

山高み谷辺に延へる玉葛絶ゆる時なく見むよしも

がも (11)二七五)

谷狭み嶺辺に延へる玉葛延へてしあらば年に来ずとも (12)三〇六七)

丹波道の大江の山のさな葛絶えむの心我が思はなくに (12)三〇七一)

巻十一、巻十二と世界を同じくすると言つてもよさそうな、この三五〇七番歌を、巻十四に採録することを保証したのは、(12)の場合と同様、この歌の収められていた資料の性格であつたと考えざるをえない。

(14) み空行く雲にもがもな今日行きて妹に言どひ  
明日帰り来む (14)三五一〇)

この歌には他巻に多くの類歌を見出すことができる。

：：み空行く 雲にもがも 高飛ぶ 鳥にもがも  
明日行きて 妹に言どひ：： (4)五三四 安貴王  
龍の馬も今も得てしかあをによし奈良の都に行きて来むため (5)八〇六 大伴旅人

ひさかたの天飛ぶ雲にありてしか君を相見むおつる日なしに (11)二六七六)

ぬばたまの夜渡る月にあらませば家なる妹に逢ひて来ましを (15)三六七二)

常陸さし行かむ雁もが我が恋を記して付けて妹に

知らせむ

(四三二六六) 常陸国防人

このように、東国の人々を含めて、広く発想され歌われていた歌であり、従つて当面の三五一〇番歌が、巻十四にあつても一向に構わないのであるが、編纂という視点から見た時、東国固有の表現を持たないこの歌を、巻十四に殊更に収めたその理由は、この歌がもともと東国に關わる歌群にあつたためと判断される。

(15) 阿須可河泊下濁れるを知らずして背ななど二

人さ寝て悔しも

(四三三四四)

安須可河泊堰くと知りせばあまた夜も率寝て来  
ましを堰くと知りせば

(四三三四五)

この歌の「あすかがは」が、大和の明日香川か、それとも大和の明日香川とは別に、東国にもあつた川なのか、見解の分かれるところである。

三五四四番歌の「背なな」は東国特有の言葉である。

しかも「下濁れる」という発想は、大和の明日香川には相応しくないという面も持つ。大和の明日香川は、清き流れととらえられ歌われるのが普通であるからである(ただし巻十四の編者がそのような認識をしていたかどうかは不明である)。従つて、阿須可河泊が大和の明日香川でないかぎり、「東歌らしくない東歌」の対

象とはならない歌である。

三五四五番歌は東国特有の言葉を持たない。「率寝て来ましを」という言い方は「東歌らしい」とも言える。ただし「率寝」の語は、巻十四所収歌以外にも、巻十六の三八二二、三八二三番歌にも見られるし、「寝」の語自体は、もちろん巻十四以外にも多く見られる語であつて、巻十四所収歌に固有の語であるわけではない。また巻十二には、次のような一見「東歌らしい」歌もあつて、複雑である。

魂合へば相寝るものを小山田の鹿猪田守るごと母

し守らすも

(四三三〇〇)

結局、三五四五番歌は、典型的な「東歌らしくない東歌」とは言えないものの、さりとて「東歌らしい東歌」とも限定できない歌である。このような歌を本節でことさらに取り上げたのは、「あすかがは」の地名があり、そこを検討して見る必要があるからである。

さて巻十四の編者は、この二首を〔国土不明歌〕に分類している。東国に「あすかがは」が有るのか無いのかを確認できなかったのである。ということは、もしこの二首が、例えば巻十一、巻十二等の編纂資料と共通する資料に収められていたとしたら、巻十四の編

者は、この二首、少なくとも三五四五番歌を、共通資料の中から抽出し、巻十四に採録することはしなかったであろう。大和の明日香川は、誰知らぬことのない、著名な川であったのだから。

この二首が巻十四に収められることになったのは、(この二首が)東国に関わる歌の資料群(「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」)にあったために、編者は二首に見える「あすかがは」が、東国にある川の名と判断せざるを得なかったからであろう。

(16) あぢの棲む須佐の入江の隠り沼のあな息つかし見ず久にして (14)三五四七

この歌には巻十一に次のような類歌があり、また東国の歌であることを主張する表現も見られない。

あぢの棲む須沙の入江の荒磯松我を待つ子らはた  
だひとりのみ (11)二七五二

三五四七番歌が巻十四に採録されたのは、「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」にこの歌があったからである。

(17) ま金吹く丹生のま朱の色に出て言はなくのみ  
ぞ我が恋ふらくは (14)三五六〇

丹生は全国各地に散在する地名であって、東国に限

定できる地名ではない。東国特有の表現も持たない。また巻十一に類歌がある。

白真砂御津の殖生の色に出て言はなくのみぞ我が恋ふらくは (11)二七二五

以上のような点からして、この歌も、(16)の場合と同様、「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」にあったからこそ、巻十四に置かれることになったのであろう。

(18) 荒磯やに生ふる玉藻のうち靡きひとりや寝らむ我を待ちかねて (14)三五六二

この歌にも、東国を感じさせる表現は何もない。類似した表現を持つ歌を万葉集中に求めると、次のようである。

…荒磯にぞ 玉藻は生ふる 玉藻なす 靡き寝し子を… (2)二二五 柿本人麻呂

水底に生ふる玉藻のうち靡き心は寄りて恋ふるこのころ (11)二四八二 人麻呂歌集

ぬばたまの妹が黒髪今夜もか我がなき床に靡けて寝らむ (11)二五六四

明日香川瀬々の玉藻のうち靡き心は妹に寄りにけるかも (13)三二六七

これらの歌と並べてみると、当面の三五六二番歌は「別に東歌らしい特色は見当たらない」（『萬葉集全注』<sup>第10巻</sup>）、「優婉な歌で東歌らしさは感じられない」（『萬葉集釋注』<sup>七</sup>）と、評されるのももつともであり、そのよな歌が卷十四に採録されたのは、「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」に収められていたからであろう。

では次に〔国土不明歌〕の「防人歌」部であるが、この部立に収められた五首（⑭三五六七～三五七二）は、三五六七番歌に問題が残るものの、それ以外はすべて「東歌らしくない東歌」である。この「防人歌」部五首の編纂上の問題については、拙稿「万葉集卷十四「防人歌」の編纂」（『万葉学論攷』）松田好夫先生追悼論文集）一九九〇・四）で考察した。

次に〔国土不明歌〕の「譬喩歌」部であるが、この部立に収められた五首（⑭三五七二～三五七六）のうち、東国に特有の表現を持たない歌は一首である。

(19) 小里なる花橘を引き攀ぢて折らむとすれど  
ら若みこそ  
(⑭三五七四)

この歌単独では、卷十四に採録されるべき根拠を持たない。「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」

にあつたがゆえに、卷十四にその位置を占めることになつたものと考えられる。

つぎに〔国土不明歌〕の「挽歌」部であるが、この部立に収められた歌は一首（⑭三五七七）である。

(20) 愛し妹をいづち行かめと山菅のそがひに寝し  
く今し悔しも  
(⑭三五七七)

この歌には東国に固有の表現はない。ただ「愛し妹」という言い方が、東国的であるという程度である。卷七の「挽歌」部に次のような歌がある。

我が背子をいづち行かめとさき竹のそがひに寝し  
く今し悔しも  
(⑰一四二二)

このことも考え合わせて、この歌は「東歌らしくない作だ」（『萬葉集全釋』<sup>第10巻</sup>）と見てよいだろう。「東国に関わる相聞歌を中心とした一大歌群」の中にあつたのであろう。なおこの三五七七番歌については、拙稿「万葉集卷十四の編纂——「雑歌」部を中心に——」（『萬葉集研究』第一九集、一九九二・一一）の第四節で詳しく述べた。

以上、〔国土不明歌〕の中の「東歌らしくない東歌」をあげて、それらがいったいどのような性格の資料群の中にあつたのかを推してみた。ちなみに、歌数は、

全一四三首（全形異伝歌三首を含む）のうちの一〇首で、約一五パーセントにあたる。

三 「国土判明歌」中の「東歌らしくない東歌」

〔国土判明歌〕は、歌に詠み込まれた地名が、どこかの国に属するのかを、巻十四の編者が判定できた歌、ないしは歌中に国名そのものを含む歌を集録している。従って〔国土判明歌〕は、東国の地名を含むという点においては、「東歌らしくない東歌」は一首もないのである。

ただし地名の部分を除けば、どこにも東国を思わせる表現が見られない歌もある。以下、歌を列挙する。

- (A) 夏麻引く海上瀉の沖つ渚に舟は留めむさ夜ふけにけり (14)三三四八、上総国
- (B) 葛飾の真間の浦廻を漕ぐ舟の舟人騒く波立つらしも (14)三三四九、下総国
- (C) 信濃なる須我の荒野にほととぎす鳴く声聞けば時過ぎにけり (14)三三五二、信濃国
- (D) 霞居る富士の山びに我が来なばいづち向きてか妹が嘆かむ (14)三三五七、駿河国

(E) 伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむものを乱れしめめや  
或本歌曰、白雲の絶えつつも継がむと思へや乱れそめけむ (14)三三六〇、伊豆国

(F) 鎌倉の見越の崎の岩崩えの君が悔ゆべき心は持たじ (14)三三六五、相模国

(G) 百つ島足柄小舟歩き多み目こそ離るらめ心は思へど (14)三三六七、相模国

(H) 武蔵野の草葉もろ向きかまくも君がまにまに我は寄りにしを (14)三三七七、武蔵国

(I) 埼玉の津に居る舟の風をいたみ綱は絶ゆとも言な絶えそね (14)三三八〇、武蔵国

(J) 夏麻引く宇奈比をさして飛ぶ鳥の至らむとぞよ我が下延へし (14)三三八一、武蔵国

(K) 筑波嶺にそがひに見ゆる葦穂山悪しかるとがもさね見えなくに (14)三三九一、常陸国

(L) 筑波嶺の岩もとどろに落つる水よにもたゆらに我が思はなくに (14)三三九二、常陸国

(M) 上つ毛野伊奈良の沼の大蘭草外に見しよは今こそまされ 柿本朝臣入麻呂歌集に出づ (14)二四一七、上野国

(N) 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど我が恋のみ

し時なかりけり

(14)三四二一、上野国

(O) 遠江引佐細江のみをつくし我れを頼めてあさまし  
ものを

(14)三四二九、遠江国

以上の歌が「東歌らしくない東歌」かどうかは判断の分かれる面もある。東国の方言、詠りが見られない等、第一節で挙げた四つの要件（ただし「国土判明歌」の場合は、(三) 東国の地名を含まない、の要件は除く）に該当する歌を挙げてみた。

東国を旅する都人の歌、あるいは序詞の中に東国の風土、事象を詠むも、かなり一般化普遍化された詠みぶりになっているものが多い。ちなみに、「国土判明歌」九五首（全形異伝歌五首を含む）のうちの一五首、約一六パーセントにあたる。比率としては、「国土不明歌」の場合とほぼ同じである。

さてこの一五首はどのような性格の資料群の中にあつたのであろうか。いずれも東国であることの所在がはっきりした地名を含んでいる歌であるから、第二節で検討した「国土不明歌」の場合のように、「東国に關わる相聞歌を中心とした一大歌群」の存在を声高に主張する必要はないし、逆に、「極端なことをいえば、東国の所在のはっきりした地名を含む歌であれば、どの

ような資料群からでも採ることができたとも言える。そういった場合もあつたであろう。しかし大部分は、他の国土判明歌と共にあつたのであろう。確かに「東歌らしさ」を示す表現に欠けるとはいえ、格段の差異があるわけではないからである。

「国土判明歌」の場合は、所在のはっきりした地名が詠まれているだけに、その所収資料の実相を説こうとして誠に歯切れが悪いが、結局のところ、「国土判明歌」も「国土不明歌」も、ごく大雑把な物言いであるが、「東国に關わる相聞歌を中心とした一大歌群」をもとに編纂がなされたものと考えられる。

注

(1) 加藤静雄著「万葉東歌の世界」(塙新書〈美夫君志リブレ〉二〇〇〇・二、塙書房刊)は、東歌を作り、歌い、享受し、そしてそれを記録した人と場と時とが多様であることを、広い視野のもとで柔軟に説いている。

(2) 次の拙稿で述べた。

・「万葉集卷七譬喩歌と卷十一・十二」(名古屋大学文学部研究論集)〔文学21〕一九七四・三三

・「万葉集卷七と卷十の編纂」特に卷七の季節歌をめぐって―(名古屋大学国語国文学)第四二号一九七八・七

・「万葉集卷十一・十二の編纂に關する一考察―季節關係歌をめぐって―(松村博司先生古稀記念国語国文学論集)

一九七九・一一

・「万葉集巻七・巻十一の旋頭歌の編纂」(後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集)一九八四・四)

(3) その典型的な例が柿本朝臣人麻呂歌集からの抽出、採録である。ことは出典不明歌についても、同様のこと可言えらる。本稿は考えている。ただし出典不明歌の場合は、人麻呂歌集と異なり、その所出資料は単一でなく複雑多様であるので、あまり単純化して考えることはできない。ただ、各巻が編纂資料をかなり多く共有していることは確かである。

(4) 加藤静雄著『万葉東歌の世界』は「東国において歌われた東歌が、万葉集の巻十四として定着したのは、その資料が大伴家持の手に入った時、東歌集団と認識させるものがあったからである」(一七六頁)と述べている。本稿もそのように思う。

(5) ただし、巻十四の編者は、「背なな」の語の存在によって、三五四四番歌を巻十四に収めるべき歌と判断し、同じく「あすかがは」を詠む三五四五番歌も、「率寝て来ましを」という表現があることも考え合わせて、巻十四に収めるべき歌と判断したのだと考えることもできる。しかし本稿は、大和の明日香川の存在は絶大なものがあり、「背なな」一語の存在によって、編者の判断を左右させることはなかったと考える。

なおこの二首についての詳細な考察が、加藤静雄著『万葉東歌の世界』にある。参照願いたい。